

日本茶ブームで輸出が急増

海外での日本茶ブームなどを受け、抹茶の原料である「てん茶」の生産が拡大している。抹茶を含む日本茶全般を指す「緑茶」の輸出額は昨年に過去最高の115億円に達した。今後も海外での需要は増えるとみられ、県も「静岡抹茶」の生産拡大を後押しする。藤枝市で有機茶の栽

培や製造などを行う「葉つピイ向島園」は、今年、初めてん茶製造に乗り出した。2年前に「海外へ輸出したい」とするバイヤーの要望を受け、4月から新設した工場で製造を開始。園主の向島和詞さん(31)は「これまでは煎茶しか扱っていませんが、地域おこしにもつながればと思い

被覆モデル地区設定し県も後押し

日本茶は栽培方法や製造工程などの違いにより「抹茶」「煎茶」「玉露」「ほうじ茶」などに分かれる。抹茶の原料となるてん茶は、玉露と同様に一定期間覆いをして日光を遮る被覆栽培で茶葉を育てる。新芽を摘んで蒸した後、もまさにそのまま乾燥させるのが特徴で、茶臼でひいて粉末になると抹茶になる。代表的なものに、京都由来の「じこう」「さみどり」などがある。

県によると、緑茶の国内消費は低迷しているが、健康志向から海外で需要が高まっている。県内では2014年ごろから国の「強い農業づくり交付金事業」などを利用して新型のてん茶炉が導入され、輸出を意識した食

「てん茶」生産拡大

決断した」と説明する。品加工用原料としての抹茶生産が注目されるようになつた。島田市では、昨年12月に茶農家の田村善之さん(39)が中心となって株式会社「Matcha Organic Japan」を設立。市内3カ所に茶園を設け、農業基準が厳しい市内3カ所に茶園を設け、農業基準が厳しいため、完全有機のてん茶生産に取り組んでいる。

こうした後押しもあり、生産効率の高いてん茶製造ラインを整備した工場が次々と建設され、県内では13年に5カ所だったてん茶工場は3年間で12カ所と倍以上に増加。生産量も13年の375㌧から1201㌧と約3・2倍になった。

全国茶生産団体連合会の調査によると、15年の県のてん茶生産量は、京都、愛知に次ぐ3位。県お茶振興課の伊藤直樹班長は「生産力と同時にブランド力を強化して、近いうちに愛知を追い抜くことができれば」話していく。



4月に新設した工場でてん茶製造に取り組む葉つピイ向島和詞さん＝藤枝市瀬戸ノ台で

る。

【古川幸奈】

環太平洋パートナーシップ協定(TPP)

を巡る動きを背景に、国も「緑茶の輸出拡大」を掲げたほか、県も昨年度から「静岡抹茶生産拡大支援事業」を開始。てん茶の生産に必要な被覆の新技術が実証できるモデル地区を10カ所に設定し、てん茶生産を始める生産者への支援を行つている。

必要な被覆の新技術が実証できるモデル地区を10カ所に設定し、てん茶生産を始める生産者への支援を行つている。